

しまね教育の日フォーラム 2010

パネルディスカッション

〈司会〉 これより、パネルディスカッションに入ります。

パネリストとしてご提言をいただきますのは、島根県内で、日頃、社会教育や地域教育などにかかわっていらっしゃる 4 名の方です。そして、コーディネーターとして、ご意見をまとめていただきますのが、こちらの加藤寿朗先生です。

それでは、ここから進行を交代します。加藤先生よろしく願いいたします。

【1】中学生タイム

〈加藤氏〉 こんにちは。島根大学の教育学部の加藤といいます。

これから、前半と後半と 2 部に分かれていますけれど、前半のほうは今発表して下さった中学生の皆さんの発表を通して、いろいろ考えていけたらと思います。

フォーラムの趣旨は、お手元の資料の冒頭に書いてありますが、「ふるまい向上を合言葉に」この後のふるまい向上を合言葉に・・・のところを考えていけたらなど、あるいはこれから島根の推進事業としてこの・・・のところを考えていけたらなどと思います。例えば、ふるまい向上を合言葉に自分のふるまいをもう 1 回考えてみませんかというような・・・があるかもしれません。あるいは、ふるまい向上を合言葉にあいさつについて家族会議を開きませんか。ふるまい向上を合言葉に大事なことを再発見しませんか。いろいろな・・・があると思います。これを考えていけたらなというふうに思っております。

今日は、まず最初の第 1 部のほうでは中学生の皆さんの発表を手がかりに、この・・・のところを考えていけたらなというふうに思っております。

○自己紹介

〈加藤氏〉 この前のほうに登壇してもらっている中学校の皆さん、もう一度改めて自己紹介をお願いしようと思います。

〈森山さん〉 松江市立第一中学校の生徒会長の森山侑です。

普段は学校でやっぱり子どもの前で発表するので、多少はいつもと今日は違う感じかなと、思っています。よろしく願いします。

[拍手]

〈田中さん〉 益田市立鎌手中学校の田中快斗です。お願いします。

[拍 手]

〈飯塚さん〉 安来市立第二中学校の飯塚真由です。よろしくお願いします。

[拍 手]

〈加藤氏〉 いつも向き合っている人とは年齢層がちょっと違うというので、そういう意味で緊張があるかもしれないのですが、よろしくお願いします。

それから、パネリストの方、自己紹介をお願いしようと思いますが、では最初押越さんから。

〈押越氏〉 皆さん、こんにちは。私は大田市立三瓶公民館で主事の仕事をしております。押越幸子です。

大田市にあります国立公園三瓶山のふもとに住んでいます。今大変紅葉が見ごろでして、四季おりおりの素晴らしい自然に感動しながら、三瓶に住める幸せを感じております。

今私は子育てに奮闘中の保護者の皆さんと一緒に、それから三瓶公民館のお届け講座として「親学講座」を行っております。その中で保護者の皆さんの非常に前向きな姿勢と、本当にすてきな笑顔に触れて、すっかりお父さんやお母さんたちの応援団になっています。今日はちょっと緊張しておりますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

[拍 手]

〈栗栖氏〉 こんにちは。島根県の浜田市から来ました栗栖真理と申します。

私は、結婚するまではずっと東京で生まれ育ちました。結婚を機に島根に来て、なんて人柄の温かさを感じる地域だろうかと思いましたが、今もそのことは日々感じています。人と人のつながりが豊かな島根の良さを、これからも地域で育て守っていきたいと思い、地域の茶の間のような誰もが来られる、そういう地域の居場所作りを自宅の一部を使ってはじめて7年目になります。子どもとの関わりや、食を通じた人との関わり、あるいは私たち大人がもっと子どもの教育について考えたりする、学びの場を作ったり、そんなことをしています。我が家の子どもは中学生と高校生と大学生が一人ずつおりますので、今日中学生の皆さんとこの上に立っていることを、とても嬉しく思っています。今日はよろしくお願いいたします。

[拍 手]

〈田草氏〉 皆様、こんにちは。松江市で「ぼよぼよクリニック」という小児科を開業しております田草と申します。もうすぐ診療時間が始まるのですが、本日は時間休診をいただ

いて患者様にご迷惑をおかけしているのですけれども、中学生の皆さんのお話が是非伺いたくてまいりました。

小児科で子どもたちやお母さんたちと接しているのですけれども、学校医もさせていただいておまして、学校医は学校へ行こうという活動に非常に興味がありまして、また後でそのお話もさせていただければと思っております。私は 2 人の男の子の親でして、上が高校 2 年生、下は小学校 6 年生です。中学生の皆さんとほぼ同じ年代の子どもを持っておりまして、すごく今日も感じる場合がございます。是非よろしく申し上げます。

[拍 手]

〈渡部氏〉 皆さん、こんにちは。渡部幸太郎と申します。

私は、隣町の出雲市の今市というところの出身でございます。普段は経営者として企業の社長を営んでいたりもするのですけれど、2 年前にひょんなことからというか縁がありまして、こういった子どもたちの教育の場に、いわゆる P T A の会長として誘われまして、今まで私自身は子育てなんていうのは全く興味がなくて、けれども実際にこうして教育の場にふれあうことで非常に私自身の子育て感といいますか、いろんな教育に対する思いというのが強くなって、気が付いたら 2 年間もやっているということでございます。

今日は、私のいろんな経験も踏まえてお話ができればなというふうに思っています。子どもは今 4 人おりまして、皆さん多いですねなんて、渡部さん多いですねなんて言われますけど、この後もう 2 人ほど作ってなんとか子ども 6 人の家族を目指しておる次第でございます。今日はよろしく願いいたします。

[拍 手]

〈加藤氏〉 先ほど控え室でパネリストの皆さんとお話しているときに、「島根はもう十分『ふるまい』できているのではないですか。わざわざしなくてももう自慢できるほど育っているのではないですか。」というような話も出ていました。どこと比べてというわけでは全然ないのですけど、そんな話が出ていたのです。私は「ふるまい向上」にはゴールはないと思います。どこまでいっても求めていくものがあるのではないかな。あと 2 時間ぐらいですけど何か求められたらなというふうに思っております。またよろしく申し上げます。

忘れておりました。私は島根大学教育学部の加藤といたしますが自己紹介を簡単にしますと、今は大学のほうにおりますが元々小学校の教員をしていました。島根県でも小学校の教員をしていましたが、広島県でも小学校へ勤めていました。それから、愛媛県の愛媛大学のほうで大学の教員になりまして、8 年前にこちらのほうに来ました。出雲市の大社町出身です。たまたま経歴が小学校の教員から大学の教員というふうになったのですけど、そういう意味では子どもの成長というものを、あるいはその難しさも私なりに感じております。この「ふるまい」についても、小学校のどういうことが今のこの若者のもととなっているのだろうか、そういったことを考えさせてもらっています。私自身いい経験となった

らなと思ってこちらに来ました。よろしくお願いいたします。

○中学生にパネリストから感想と質問

〈加藤氏〉 それでは、パネリストの皆さんに先ほどの3人の中学生の発表についての感想を聞きたいと思います。中には質問もあるかもしれませんが、感想・質問を聞いてみたいと思います。それでは、また押越さんからお願いします。

〈押越氏〉 先ほどの松江市立第一中学校生徒会の皆さんの「こころ ほっと運動」について本当に心がホッと温かくなるような、そんなお話でしたけれども、こうした運動がほかにも広がっていけばいいなと思いつつ聞いておりました。こうした運動に取り組むのには大変苦勞があったと思います。そうした苦勞も生徒会の皆さん、あるいは全校生徒の皆さんで乗り越えてここまでやってこられたという、何か想像ができそうな気がするのですが、これからいろんな活動をしながら学校の皆さんと一緒につながりながら、いろんな活動を展開していけたらいいと思います。皆さんの成長を楽しみにしております。

それから、田中さんの「幸せのリスト」ですが、生死をさまよい、多くの人によって命が繋(つな)がった体験には言葉が出ないくらいの衝撃を受けました。お父さんお母さん家族を含め皆さんに助けられながら命をつないでいく。本当に素晴らしいなと思うと同時に、感謝の気持ちを持ち毎日毎日を大切に、当たり前を大切に生きている田中さんは凄いと感じました。これからは田中さんには前向きに頑張っていってほしいと思います。

それから、安来市立第二中学校の飯塚さんですが、「ゲゲゲの女房」この番組は私もすごく好きで毎日欠かさず見ておりました。飯塚さんの叔母さんはとても優しい心の持ち主だなと思います。優しい心がないと感謝をする心、周りの人を大切にする心、思いやりの心は生まれてこないと思います。そうした素晴らしい叔母さんとの出会いがあって、幸せについていろいろと考える機会があったと思います。本当にいい作業といいますか、いい勉強をされたと思います。飯塚さんにはこれからもいい出会いと、それから前向きに生きてほしいと思います。きっと明るい未来が待っていると思います。以上です。

〈加藤氏〉 ありがとうございます。

それでは、栗栖さんいいですか。

〈栗栖氏〉 まず、「こころ ほっと運動」というのをうたいながら、その活動のねらいの一番最初に安心して過ごせる中学校を目指したいということがありましたね。生徒会でもよく「あいさつ運動」というのがあるのですが、なぜこれをするのか、皆が安心して学校で過ごせるという思いからスタートしたというのが、まず素晴らしいなと思いました。よく私たちは大人が子どもたちを育てていくというふうに思いがちなのですが、中学生の持っている力が地域に飛びかかっていくことで地域が育つ、つまり豊かな地域は子どもによって育まれるのです。この中学生の自発的な活動、それがおそらく自信にもつながったかもしれません。そして、それはさせられるのではなく、本当に自由意志でやっている

ところ。安心と自信と自由というのを私たちは大事な権利として持っているものと思いますが、そういったものが伝わってきて非常に嬉しく思いました。

それからお二人の活動、事前に活字で読みましたけれども、やはりご本人が思いを込めて発表されたものは改めてとても感動いたしました。田中さんの文章の前半は、読んでいても本当に息が詰まるような厳しい状況の中で、その中で田中さんが感じ取ったものというのは本当に生かされている感謝と、そしてそれが自分 1 人で得られるものではないということを実感されたのが伝わりました。私も以前は看護婦をしておりまして、明日をも知れない命と向き合うことが多くございました。その人たちのなかで、必ず夜寝る前に、「また明日会えるかしら。」というふうに言われる方がいました。子どもが小さい頃「死ぬって、お母さんどういうこと。」と言われたときに、「おはようと言える毎日が、ある日突然その日にはおはようが言えない。そういう日が来ることよ。」というように答えたことがあるのですが、私たちは田中さんのような経験をしないとそれに気付けないかといったら、こうやって語ってくださる方がある。田中さんのこの体験を私たちが共有しながら、今晚のおやすみ、明日からのおはようを心を込めて言う。そのことから、会場のみなさんでいたいと思います。

それから飯塚さん。実はうちの娘もマユというので、今京都の大学で勉強しているのですが、すごく親しみを込めて聞かせていただきました。「まちの縁側」の活動を始めたいと思った頃、たぶんこのふれあいの中に感じる幸せを本当に作っていきたいというふうに思っていました。ですから、中学生でこのことをもう体感されているということで「縁側」のスタッフになってもらいたいと思ったりするのですが、私がすごく嬉しかったのは、最後に「どんな人に会えるかこれから楽しみです。」というふうに書いてありますね。今、人との関わりを避ける子どもたちが多くの中で、本当に人との出会いの中に自分の幸せや豊かさが待っていることを楽しみですと書ける中学生。私は本当に素晴らしいな、どういうふうに育てられたのかご両親にも会ってみたいな、そんなふうな思いで聞かせていただきました。ありがとうございました。

<加藤氏> ご両親、今日いらっしゃっていると思いますけれど。

次、田草さん。

<田草氏> 私、時間休診をとって呼ばれた状況ですが、本当に来て良かったです。中学生の皆様のお話を伺っていて島根は捨てたものじゃないなというのを感じることができたので、本当に来て良かったです。皆さんが今の思い、感じられたこと、得られたことをいかして、これからも皆さんの周りにそれを波及していただければ島根は本当に捨てたものじゃないと思うので、是非今の姿勢を貫いていただければという具合に思っています。

1 グループずつ、1 人ずつコメントをさせていただきますが、松江一中の生徒会の皆様のご活動で僕がすごく感動したのは、自分たちの中の運動でとどまらない。それを校区の小学校へも広げていこうという姿勢は、これは大人でもなかなかできないことだと思うのですね。それをしようとしているところが素晴らしいですし、その熱い動きが松江市に広がるだろうし、それはひいて島根県下に広がっていくと思いますので、是非その熱い思

いを次の世代、次の後輩の皆さんに伝えていただいでその熱い思いが途切れないことを祈っております。

益田鎌手中学の田中さんですが、田中さんには「Time is life」という言葉を贈りたいと思います。Time is lifeというのは、時は命なりという意味なのですけれども、時間は掛替えのない命の時間だよという言葉です。それを大きな闘病生活を通して得られた田中さんは、本当に大人になって初めて気付く、あるいは死ぬ前になってようやく気付くことを中学生という時代に気付かれたので、本当にこれからの人生が楽しみだなと思いますので、是非今の思いを持ち続けていただければと思います。

安来の飯塚さん。「ゲゲゲの女房」は私も通勤のときにテレビの音声だけで聞いて楽しんでいたので、でも、「ゲゲゲの女房」を叔母さんに持たれて、その中で人とのつながり、飯塚さんがお話した中であつた自分がこれから人を助け、そして助けられ生きていきたいというふうなことをおっしゃっていると思うのですが、そういうことに今気付いていらっしゃるということは本当に素晴らしいことだと思いますので、是非今の思いを続けてください。本当にありがとうございました。

〈加藤氏〉 ありがとうございます。

それでは、続いてお願いいたします。

〈渡部氏〉 私が中学生だったときはですね。今から 20 年ぐらい前の話なのですけれども、こんなことを考えたことが一度もなかったようなことを、今日 3 人の中学生の皆さんが発表していただいたなと思います。何と言いますか、私が中学生のころは、本当にもう部活ばかりやっていて自分の私利私欲のことしか考えてなく、周りのことに気を配るなんてことは一切なかった。自分の周りにもそういう人間がおそらくいなかったのではないかな。一部いたのかもしれませんがそんなに目立った存在はいなかったと思います。その辺り、今日は 3 人のお話を聞いて非常に頼もしい気がいたしました。

まず、森山君です。ちょっと質問ですけれども、この運動のネーミングというのは誰が付けたのでしょうか。後で教えていただきたいなと思います。本当に僕が森山君のお話を聞いて一番心に残ったのが、地域から誇りとされる学校でありたいというところだと思います。なかなかこんな言葉は言えないと思いますね。誇りにされるということは、まず自分たちが自分を意識、地域からの信頼も得られるようなそんな生徒になりたいというようなことだと思いますけれども、本当に自分の学校がそれだけ好きなんだな。自分の友達、先生、学校、自分の地域が本当に好きじゃないとそういう言葉を僕は発することができないんじゃないかなと、そういう点すごいなというふうに感心をいたしました。

そして、「幸せのリスト」の田中君についてはですね。本当にその幸せのリストがなんでもないことだった。なんでもないことが幸せに思えた瞬間を中学校のときに気付いたということは、本当に大人でもなかなかそういうことに気付く人はいないので、中学校のときにそういう思いをしたということは今後の人生に必ず役に立つことじゃないかなと思いましたし、僕自身は何より改めて周りの皆さんに感謝をしなければならぬなと、帰って嫁さんにも「ありがとう」と一言伝えないといけないなと、そういう気になったお

話でした。ありがとうございました。

そして、飯塚さん。周りの人とのつながりを感じる幸せ。現代社会は、どうしても近所付き合いとかがなかなか良くなかったりとか、私の周りでもたくさんありますけれども地域のそういうお祭とかイベント等々にもなかなか参加してくれない。そういう心の会話ができない中、同じく「ゲゲゲの女房」からそういったことを教わったということは本当に貴重な体験になったのではないかなというふうに思います。

3名とも、すごく素晴らしい発表をしていただきました。是非この島根県で生まれて良かったなということを感じていただきたいなと思います。皆さんがそういうふうな経験ができたというのも、やはりこの地域があつてのことだと思いますし、お父さんとかおじいさんとか、県内のこの土地に住んでいる皆さんが築かれた習慣・文化・歴史だと思いますので、是非そういった地域に対しての感謝の心も忘れずにしていただきたいと思います。ありがとうございます。

○質問についての答え

〈加藤氏〉 今渡部さんのほうから、一中の活動について「ほっと運動」と名前を付けたのは誰でしょうか。

〈森山さん〉 生徒会の役員が7～8人いるのですが意見を出し合って、それで皆でこの内容に合ったネーミングをしようということでいろいろ出たのですが、やはり心が温かくなるような運動ですから、「こころ ほっと運動」がいいんじゃないかという生徒会全員の賛成でこういうネーミングになりました。

〈加藤氏〉 渡部さんいいですか。

〈渡部氏〉 はい。

〈加藤氏〉 今パネリストの4名の皆さんに感想を述べてもらいましたが、是非フロアのいらっしゃる先生方からも今日の中学生の3人の発表について感想で結構なのですが、一言いただけたらと思うのですがごさいませんか。

今マイクを持っていきますので。

〈フロアから〉 3人の中学生の諸君が、出会い、つながりということを過去・未来・現在について発表していたことを非常に感動いたしました。あえて私は田中さんにエールを送りたいと思うことがあります。言いたいことは、世の中にはもうすごい人がいっぱいおられると、皆さんは既にもうすごい人と今つながりを持っておられますけれど、これから先もっといろいろなすごい人と出会えると思うので、世の中非常にいい人が多いもので、特に田中さん頑張って元気に中学生生活は元より大人になってもらいたいと思います。ありがとうございました。

〈加藤氏〉 ありがとうございます。

そのほか何かご発言ございませんか。よろしいですか。

今一中のほうは森山君が登壇しておりますけど、3人の森山君、田中君、飯塚さん、今日発表されて、発表を終えて今どんなことを思っているのかなということを少し聞いてみたいのですが、それでは森山君。

〈森山さん〉 やっぱり自分の発表もそうなのですが、ほかの2人の発表を聞いて、特に田中君なのですが、自分の命の重さとか大切さを知ったし、これからまだ中学生という未熟なとか、これから先の人生のほうの方が長いからもっと大事にしていこうと思いました。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 では、田中君。

〈田中さん〉 弁論をし終わってほっとしています。たくさんの人に聞いてもらって本当に嬉しかったです。本当は原稿6枚ぐらいあった原稿を3枚半にまとめて発表したのですが、まだ感謝の気持ちがいっぱいあります。本当に今日は聞いてくださってありがとうございました。

〔拍手〕

〈飯塚さん〉 私も今日「ゲゲゲの女房が教えてくれたこと」という題で弁論を発表させていただいて、私が一番皆さんにこの弁論で伝えたかった人と人とのつながりということを皆さんにしっかり伝えることができたかなと思っています。この頃は、すごく便利な機械とかがあってすごく生活はしやすいのですが、周りを見るとあいさつができていなかったり、人のことを思いやることができなかつたりしてちょっとどうかなと思うところがあるので、この弁論を書くことでその人を思いやることの大切さというのをまた改めて実感することができました。そんなことが私もできる人になりたいなと思っています。今日はありがとうございました。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 「ふるまい向上」の取組の中に、大人は子どもたちに何ができるだろうかというような言葉がよく出てくるのですが、今日この時間、いろいろな話を聞かせてもらって、私たち大人は子どもたちから学ぶことがたくさんあるのではないかなということを感じました。ご出席いただいた皆さんいかがだったでしょうか。

例えば飯塚さんの発表では、人への感謝や人とのつながりを大切にするということが出ました。「ふるまい」というものの根っこにあるのは、人を大切にする心ではないかなと思いました。人を大切にする、人とのつながりを大切にする、その心が表に出たときに私たちは良き「ふるまい」ができるのではないかな。あるいは、心のこもった「ふるまい」ができるのではないかな。大事なものは、人を大切にする心なのではないかなということをお話

さんの発表から教わりました。

同じことは、田中君の発表の中にも出てきました。人を大切にする、感謝するということが出てきました。田中君の発表で特に私が感じたのは、今を大切にする、今生きていることを大切にする、そして自分を大切にすることです。やはり人を大切にできる人は、自分を大切にできる人なのではないかな。それを実感を持って生きられている人は、人を大切にでき、それは人への良き「ふるまい」として現れるのではないかな、そういうことを感じました。

松江一中の取組、私の息子も一中生だったのですが、いい取組だなと思いました。先輩後輩関係なしに困っている人を進んで手助けする。おかしいな、変だなと思ったことは見逃さない。陰口を言うとか、人に嫌がることはしない。あいさつをするなどお互いが声をかけ合う。ルールやマナーを守って過ごす。こういった活動に賛同する人はハート型のクリップを胸に付けて、がんばりましょうという取組でした。これは一言で言ったら、自分に約束するという事なのではないかなと思うのです。困っている人がいたら手助けをする。なぜですか、それは私が自分に約束したことなのです。陰口を言わない。なぜですか、それは私が自分に約束したことだからです。この自分に約束するという事は、とても大事な事だと思います。先ほど栗栖さんの発言の中だったのでしょうか、させられるのではなくて自分でするという言葉が出てきました。自分で自分に約束したからそれをやるのです。そういう気持ちというのは、大事なんじゃないかな。一中の「こころ ほっと運動」というのは私なりの言葉でまとめると、自分に約束するという事であり、こういう気持ちというのを皆が持てると、それはさせられたことではなくてすることになるのだと思います。

いずれにしても、3人の発表から私は多くのことを学ぶことができました。「ふるまい向上」は、大人が子どものためにしてやるのではなくて、大人も子どもから学び一緒に向上しよう、そういう運動なのかなというふうに感じました。中学生からたくさんの方を学べるいい時間だったかなというふうに思います。

この辺で中学生の皆さんに登壇してもらう前段を終えようと思いますけど、皆さんから是非エールを送りたい、メッセージを送りたいという方がいらっしゃったら最後に時間をとりたいと思いますがいかがでしょうか。では、教育長さん。

〈今井教育長〉 本当にありがとうございました。今加藤先生のほうで全体をまとめていただきまして、3名の方、非常にいい活動を発表していただきました。森山君、是非この運動を本当はもう全県、島根県内でどの学校でもやっていただきたいぐらいですけど、取りあえず第一校、全校でできるように頑張ってください。それから、田中さんと飯塚さん、お二方それぞれ事例は違いますが、普段誰もが経験できないようなそういったことから普段の生活の大切さ、これを本当にいい具合に発表していただいたと思います。私も感激をいたしました。お二方、今後とも是非今日発表していただいたことを心にいつまでも持って学生生活をしていただきたいなというふうに。本当にありがとうございました。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 3人の中学生の皆さんにもう一度あたたかいお礼の拍手をお願いします。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 それでは、パネルディスカッションの最初のほうを終えたいと思います。ここでいったん休憩に入りたいと思います。

〔休憩〕

【2】パネリストタイム

○ふるまいに関するこれまでの取組について

〈加藤氏〉 それでは、パネルディスカッションの後半のほうを始めさせてもらおうと思います。中学生の一中の生徒さんが残ってくださっています。また活発なこれが「ふるまい向上」のディスカッションだということを見せられたらいいなというふうに思いますが、ご協力いただけたらと思います。途中でフロアの方にご意見とかご質問等を受ける時間を十分にとりたいと思いますので、是非またいただけたらというふうに思っています。

それでは、後半はまず4名のパネリストの方々に「ふるまい」をキーワードにしたときにそれに関わるどういう取組をやっているか、あるいはその取組はどういう思いや願いに支えられて行われているかということを知りたいと思います。先ほどは押越さんから話していただきましたが、今度は渡部さんのほうからこっちへ戻ってくるというような感じで、ご発表いただこうと思います。では、渡部さんよろしくをお願いします。

〈渡部氏〉 失礼します。

そうしますと私のほうからは、まず始めにPTAの会長としましていろいろ取り組んでいることがございまして、それをちょっと発表させていただこうかなと思います。ところが、最初に「この『ふるまい』に関するこれまでの取組は何ですか。」と言われたとき非常に迷いました。そもそも「ふるまい」というものは早寝、早起き、朝ごはんとか、出した物はきちんと片付けるとか、そういう言ってみれば普段の生活習慣の当たり前のことをやっているわけですから、「ふるまい向上」だからといって何か取り組んでいるわけではありませんので、果たしてじゃあ何を発表したらいいのかなというふうに随分迷いました。ですが、先ほどもキーワードありましたけれども、人と人とのつながりを育んでいくというキーワードがありましたので、それを切り口に発表したいなと思います。

私は今、出雲市の今市幼稚園というところの幼稚園のほうのPTAの会長をしております。その中で、やはり人と人とのつながりをもっともっと育んでいこう。それは子どもと親のつながり。特にお父さんと子どものつながりを深めようじゃないか。どうしても、私が知っている限り幼稚園教育というのは、幼稚園教育というか幼稚園のPTAについていますと、女社会なのですね。お父さんがあまり参加していないのです。ほとんど見かけま

せん。そういう女の仕事になっているようなところがございますので、これはいかなんと。

やはりお父さんも、お父さんはお父さんなりのダイナミックな発想であったり、力強さ、こういった良さがありますので、そういうものをもっともっと幼稚園の現場の中を出していこうじゃないかということを考えまして今市幼稚園では、「おやじの会」というのを結成いたしました。これが「おやじの会」のロゴなのですが、怪しげなお父さんが力こぶ 3 つ作っているという、この「おやじの会」の結成をいたしました。先ほども申し上げましたように、目的としてはお父さんの発想、ダイナミックさ、それから力強さを園の中に取り入れていくということと、もう 1 つはお父さんに子どもと接する機会をもっともっと増やしていこうじゃないかというようなことが目的で発足をいたしました。

何ができるかというたくさんあるのですが、今年やった取組といたしましては、「おやじレンジャー」という戦隊ものを結成いたしまして、とにかく子どもたちを喜ばせてやろうじゃないかと。お父さんも皆さん意外と好きなのですね。昨日も実は、「おやじレンジャー」の練習が、舞台稽古があったのですが、今週の日曜日に実は秋祭りがありまして、そのときに「おやじレンジャーショー」をやろうと思います。20 分間時間をいただきまして、練習をもう早速始めております。そうすると、本当に皆さん憧れていたのか何なのかわからないのですがのぼせ上がってですね。本当にもう決めのポーズなんかが決まるまでに 1 時間ぐらいかかっていました。お互いがお互いのポーズを見ながら「これはちょっと。」みたいなことを言ったりとか、中にいろんなギャグを込めて笑いをとったりですとかがあったりとかですね。非常に楽しく子どもたちを喜ばせることができるのではないかな。これがたぶん母親だとなかなかできない技（わざ）じゃないかなと思いつつ、非常に皆各々がビデオで自分の踊りをチェックしながら、ダンスの先生も呼んで本格的にやっているというふうなことを行っています。

2 つ目は、これがすごいのですが、なんとおやじ連中で遊具を作ろうじゃないかと。遊具です。園庭に遊具が今市幼稚園にはあまりないのです、広いのに。昔から今市幼稚園には遊具がなくて、周りの幼稚園に比べていけないかと、子どもたちの教育にとってもう少し遊具があったらなという、そういう歴代の園長先生の願望もあったのですが、じゃあお父さんが作ってやろうと。当然安全面とか、そういったことに配慮したものです。激しい回転のあるものとか、そういったものではないのですが、木でそれも設計から全部お父さん方が集まって始めまして、特にこれもちょっと小さいのですが、船ですね、ビッグシップ。船にクライミングしたりとか、すべり台なんかでもいろんな資材が使っているこの船を組んでいるということで、これも再来週から今ちょうど材料が整ったところですのでそれを組み立てて釘を打っているというような作業をこれからしていきたいなというふうに思っています。

それからもう 1 つが、「おやじカプセル」というのはどうだということで、これは簡単に言うとタイムカプセルのことなのですが、園児が二十歳になったとき、今は年長さん 5 歳ですかね。卒園式のときにお父さんお母さん、先生がその子どもにメッセージを残してあげましょう。それをバインダーにすると、卒業アルバムみたいな形でとっておいて、その子たちが成人式になったときに初めてこれを開けてあげようじゃないかと。毎年それをやっていったら、必ず今市幼稚園で卒園する園児は、二十歳になったときにお父さんお

母さんがどれだけの思いで育ててくれたのか、その愛情とか絆そういったものを伝えたいなと思いました。先ほどの「おやじの会」もそうなのですけれども、すべてはおやじがただ単にやりたいからとかという自己満足の世界ではなくて、1つのテーマを持ってやっております。それが「絆」です。とにかく絆を育んでいこうじゃないか。親と子ども、それから先生と子ども、それと子どもと地域、この絆をしっかりと育んでいくことを、これからずっと伝えていこうと。この1年間で終わるのではなくて、ずっと継続的にその絆が育まれ、いずれ園児たちが大人になったときにまた僕らがやったようにのぼせ上がって、だららずになって、子どもたちのために遊具を作ったり、そのときは何を作っているかわかりませぬけれども、そういうものを伝えていく。大人もおやじの背中をしっかりと見せてお父さんの役割というものを伝えていきたいなというふうに思って、今取り組んでいるところでございます。以上です。

〈加藤氏〉 ありがとうございます。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 人と人とのつながりを大事にするということから、絆ということが出ました。子どもたちにメッセージを送るんだ。思いをメッセージにして送るのだというのが、何か今発表の中で感じたように思います。

それでは続いて、田草さんお願いします。

〈田草氏〉 お願いします。本来診療中の田草でございます。

5分間ほど皆様の貴重なお時間をいただきまして、「ふるまい向上」に関する私の考えを発表させていただきますが、特に中学生の皆さんに考えていただきたいと思って原稿を考えてまいりました。「ふるまい向上」というのを考えるときに、人間ってなにということから考えたほうがいいのではないかなと私は思っています、人間という字がありますよね。人間ってどこに生きていると思いますかって問われたら、皆さんならどうお考えになりますでしょうか。5秒ほど。その答えは、あてませんけれども、人間という言葉の中に隠されているのかなと、人と人の間に私たちは生きているのではないかなと思います。だから、人間、私たちは人間ですから、その人間の関係で皆様が発表をする中で言われていた一中也目指しているもの人間関係ということが、やはり一番大事かなという具合に考えています。「ふるまい向上」というのは、人間関係を円滑にするための秘訣みたいなものじゃないかなという具合に僕は考えています。

ちょっと小ネタを用意してまいったのですが、私先日小学生の皆さんと保護者の皆さんに、ある勉強会で問わせていただいたことがあります。ジャン。これは何でしょう。ジグソーパズルの1つのピース、ワンピースなのですけれども、これ質問しました。「皆さん、このジグソーパズルの1つのピースを1人の人間と考えたらどういう具合に考えることができますか。」という質問をいたしました。一中の森山さん、ご意見ありますか。ちょっと遠いので聞きにいていないのですけれども。すみません。ありがとうございます。これが1人の人間と考えていただくと。

〈森山さん〉 やっぱりたくさんワンピースがあつると 1 つの絵が完成するということだと思います。

〈田草氏〉 ありがとうございます。拍手をお願いします。

[拍 手]

〈田草氏〉 たくさん集まると 1 つの絵が完成する。その小学生たちも皆さんいろいろなお答えをいただいたのですが、「皆いろいろな形や違いがあつていいんじゃないかな。」というご意見とか、「1 つ欠けても困るのだよ。」ということとか、あと森山さんがさっき言われた「皆で力を合わせると、1 つの素晴らしい作品が出来上がるよ。」というようなお話をいただきました。私はそのときに子どもたちに、「あなたも私も皆すてきなワンピースなので、是非手を取り合ってやっつていこうね。出っ張りや引っ込みがありますよね。出っ張りは自分の得意なところで、それを皆につなげていくためにある。そして、引っ込んだところは自分の苦手なところで、人から助けてもらうためにある。」というふうに考えています。その考えを小学生にお伝えさせてもらいました。そんな中で、このジグソーパズルの 1 つのピースとして活躍してもらうためにやっぱりつながりが大切だなということに気付かしまして、「しまね思いやり塾」というものを開催させていただいております。鳥取大学に高塚人志先生という先生がいます、ヒューマンコミュニケーションということを医学生や看護学生に人間関係を学んでいただくためにそういう場を提供されている先生です。その先生をコーチとして 2 年前から今年 3 回ほど開催させていただいたのですが、今までは延べ 180 名ほどの参加者の方が参加して下さって体験学習をします。例えば、1 本の鉛筆から思いやりの気持ちを学んだりとか、あとハンディキャップを乗り越えて相手を思いやることを学んだりとか、そういうふうなことを体験学習していただくということをやっつて、相手への思いやりの表し方を体験して学ぶ。参加者の対象ですが、私の息子が中学校 3 年生のときにも参加してもらって、私の親父にも参加してもらって 70 ぐらいの高齢者まで老若男女の方が、医療関係や福祉関係、介護関係、保育関係、学校関係、いろいろな企業の人たちのいろいろな職種の中でいろんな体験を通してお互いに気付いていくというような場を提供して、コミュニケーションの勉強をさせていただくことができました。大人もですね、大人が決して完成されたものではなくて、やはり学んでいけないといけないという具合に思っていますので、子どもも大人も一緒に勉強するような場がこれからも必要なのではないかなという具合に考えています。

そして、自己紹介で申し上げたのですが、学校医は学校へ行こうという活動に興味がありまして、これは全国的な動きはあるのですが島根県で一生懸命行っているのはまだ私だけで少数派なのですけれども、こちらには校長先生をご経験の先生方もいらっしゃると思うのですけれども、なかなか学校医が小学校・中学校、学校現場に積極的に訪れるという機会があまりなかったのではないかなという具合に推測いたします。私は学校医になりたくてなったもので、学校医は学校へ行こうという考え方に非常に共感を持ちまして、健康診断がありますね。健康診断のみならず、月 1 回健康相談というので保護者の方や養

護の先生の相談を受けさせていただいたりとか、あと一中にも伺ったことがあるのですが、
れども「喫煙防止教室」というのでタバコの害について子どもたちにメッセージを届けさ
せていただくようなことをさせていただいたりとか、そういう活動をさせていただいてお
ります。自分のその得意な部分を周りの人たちのために使っていくということが「ふるま
い」なのかなという具合に考えております。

私にとっての「ふるまい向上」は、あなたも私もすてきなワンピースで、自分の得意な
ところを発揮して周りの方を温めていくことであるという具合に考えております。ご清聴
ありがとうございました。

[拍手]

<加藤氏> 「あなたも私もすてきなワンピース」という言葉が出まして、いい言葉だなと
思います。また、渡部さん田草さんへの質問等も受けますので、是非こんなこと聞いてみ
ようかなと考えておいていただけたらと思います。

では、栗栖さんお願いします。

<栗栖氏> 「ふるまい向上」に関する取組ということですが、「まちの縁側」では子どもと
の関わり、あるいは中学生との関わりというのが少し多いかなと思うので、その辺りから
ご紹介しながら思いを伝えたいと思います。

「まちの縁側」は7年前に始まったのですが、毎月1回必ず土曜日に子どもたち
とお昼ごはんを作って食べます。中には朝ごはんを食べて来ていないなという子どももい
ます。みんなで一緒に食事をするということはいろんなことが含まれているなと思ってい
ます。まず、その地域の方が「縁側で使って。」と言って野菜を届けてくれます。それから、
初めて包丁を使いながら一生懸命する子どもの気持ちが込められる。「これ美味しいね。」
とか、「ありがとう。」とか、「ごちそうさま。」と、何か食べることを通して感謝する気持
ちとか真心を込めていくこととか、あるいは物を作る喜びとか、何かに集中することなど、
すべて食には入っているなというのが7年間子どもと毎月お昼を囲みながら感じています。
縁側では、「食」というのは誰でも参加できる。赤ちゃんからお年寄りまで全部参加できる
キーワードだなと思って大事にしている活動です。そこで、皆が、お互いに「ふるまい」
が温かくなっていくのではないかと、いうふうに思います。

今日は松江一中の頑張った姿を見させていただきました。浜田の一中生も頑張っている
ので、少しご紹介したいと思います。5年前から地域の子どもは私たち大人が一生懸命頑張
って育てようという思いで、公民館を拠点に縁側やいろんな地域の大人たちがいろんな活
動をしているのですが、その1つに放課後の子どもたちの育つ環境をちょっとでもよい
ものにしたいという願いがあります。今までは例えば「まちの縁側」が子どもの居場所
であると、そういう感じで活動していたところもあるのですが、そうではなく、できる限
り広いところでたくさんの子どもにとって自分の居場所ができるといいよねと。そこで考
えたのが中学生の力を是非借りたいということで始まった「放課後あそび隊」という活動
です。何のことはない。放課後部活のない職員会議のある月曜日に中学生が地域の人と一
緒に小学校に行って遊ぶ。ただそれだけのすごくシンプルな活動ですが、そこでの

中学生は本当に輝いています。喧嘩をしている子どもがいたら大人はついついどっちかを悪者にして「謝りなさい。」とかと言うのだけれども、「どうしたの。」と丁寧に子どもたちの言い分を聞いている中学生とか、あるいは最後皆であいさつをして帰ろうと思ったときに、なんとなく大人が「さあ、あいさつをしましょう。」と言うと、子どもは言わされている感じなのです。でも、中学生が「楽しかったね。また遊ぼうや。ばいばい。」なんて言うのと、本当に子どもたちは自然に「ありがとう。また遊ぼうね。」というふうになる。そんな姿を見えています。

この活動が今5年目で、当時小学生だった子どもたちが今度中学生になって、「あのときお兄ちゃんお姉ちゃんに遊んでもらったから。」と言って、今中学生が「今度は自分たちが遊んであげる。」という形で来ています。今、残念ながら、地域の大人、PTAの活動になかなか参加できない、いろんな事情で地域と関わろうとする大人が少ない中、「放課後あそび隊」でボランティアとして地域貢献をした中学生が、お父さんやお母さんになったときには、きっと地域との関わりを上手に、自分たちの子どもを上手に育てていけるのではないかな。だからこの活動はすごくシンプルだけれども、地域と中学校の皆さんと子どもたちと続けて行きたいなと思っています。

日本の子どもと、児童労働といった、学校に行かずに仕事をさせられている子どもたちとどっちが不幸かということをお話することがあるのですけれども、もちろん学ぶ権利が保障されていない子どもたちはかわいそうです。でも、勉強だけしていればいいですよというのでは、私たちの子どもたちは段々と元気がなくなるのではないかなと思います。本当に、あなたは地域にとって掛替えのない一市民であり、大事な仲間だよということが言える関わり、その中に子どもたちは責任ある行動をとっていく。「あそび隊」では、小学生の前で乱暴な言葉を使ったりする中学生はいません。やはり、異年齢で遊ぶことが少なくなりましたけれども、自分よりも下の学年の子どもたちの前で責任のある「ふるまい」が見られます。子どもも大人もなのですけれども、こうした活動を通じて、「ふるまい」というものが深まっていくのではないかなと思っています。本当に今日は中学校の頑張っている活動を聞いて、浜田一中生ともまた頑張りたいなというふうに思っています。ありがとうございました。

[拍手]

<加藤氏> 最後に押越さんのほうからお願いします。

<押越氏> 私は保育園の保護者の皆さんを対象に、それから公民館のお届け講座で「親学講座」を行っています。

「親学講座」といいますと、一方的に難しい話を聞くというイメージがあるようで敬遠されがちですが、この「親学講座」というのは、参加者が主役のワークショップを中心としていますので、決して堅苦しい講座でもなんでもありません。テーマを決めて参加者同士で気楽に子育てについて胸のうちの話を語り合ひましょう、という講座です。構えて来ていただくような講座ではありません。本当に気楽に参加していただける講座なのです。

よく、「いやー、そんな、『親学講座』なんて堅苦しくて……」と言われることがあ

るのですけれども、「そんな難しい講座ではなく参加者が主役です。」ということをお話して、来ていただくようなこともあります。それから、講座の内容ですけれども、この講座は参加者が主役でワークショップを中心に行いますので、テーマを決めてそれに沿って行います。

まず講座を始める前に、「皆さんで仲良くなりタイム」という、仲良くなりましょうということで皆さんに楽しいゲームをしてもらいます。それから、先ほど言いましたけれどもテーマを決めて、私がよく行うテーマは「正しいしつけは子どもへの大切な贈り物」という、ほとんどこのテーマが多いのですけれども、参加された保護者さんには「あなたはしつけで大切にしていることはなんですか。」という普段しつけで大切にしていることを、カードに書いていただきます。結構たくさん書かれます。これは一部ですけれども、生活に関すること・道徳に関すること・親の姿勢というふうにごく大まかに3つに分けております。そのカードを基に各グループで、話し合ってもらいます。

話の中で、しつけについて、これはどうしていいかわからないとか、これはちょっと迷っているとか、そういうカードがどんどん出てきます。そうしたときに、参加者同士、参加して下さった親さん同士が「あ、あれはね・・・」とか、年齢もまちまちですので、参加者同士でアドバイスが出たりして最終的に参加して下さった保護者さんは、「いや、しつけってすごい大事なんだね。改めて感じた。」とか、それから「しつけって普段あまり考えたことがないけど、こんなにたくさんあるんだね。」とか、「他の家庭のしつけの話を聞いて、自分では気が付かなかったことがたくさんあって参考になりました。」と、親さんが気付かれるわけです。

中には、「いや、今日はすごくいいお話を聞いたから、早速帰って実践してみよう。」というようなことを言われた方もあります。それは直接しつけとは関係ないのですけれども、「我が家では、お父さんをととても大事にしている。」というカードが出てきたのです。それを見られたお母さんが、「いやー、私のところはお父さんを大事にしていないんだわ。」と言って、「うわー、すごいね。私も今日から努力してみよう。」とか、そんな和気藹々（わきあいあい）とした雰囲気の中でいろいろと気付かれます。

参加された保護者さんの多くが、「普段はなかなかほかの保護者さんとゆっくりと子育てについて話をする時間や機会がないので、今日は不安に思っていたしつけについて皆さんと話し合えて良かった。是非またこんな機会を作ってください。」と言われます。私も1人の男の子を育てましたので、いろいろなことがありました。でも家族の、私の場合はおばあちゃんとか、隣近所も含めて地域の方、それから同じ子育てをしている仲間、そうした人たちにたくさん助けられながら子育てをしていたのだなと振り返ってみてもそう思います。

最近では、核家族とか共働きの家庭が多いので物理的な時間がない。時間的にゆとりがないと言われる方が多いですね。ですから、せっかくこんないい講座をしようと思っても「いや、ちょっと時間がなくて参加はできない。」とか、「行けない。」とか、「行きたいけど行けない。」という親さんもおられます。そうしたところをどのようにして時間を作ってあげられるかというのは、私のほうで少し工夫をするところなのですけれども、その辺にちょっと課題があるかもしれません。

私は、保育園の送迎の時間を利用させてもらったり、あるいは保育園の保護者会の時間を使わせてもらったり、それから保育園の行事のちょっと前の時間をいただいたりとか、そういったことを考えながらやっております。保育園の送迎の時間では保護者さん同士が顔を合わせてもあいさつをする程度で、それ以上の深い話をする時間がないということを言われます。でも、実は保護者さんは自分の子育てに大変不安だらけで自信を持っておられません。本当にこれでいいのかしら、とっておられます。「人には聞けないけど、人には話したことがないけど・・・こんな子育てでいいのかしら、こんな時ほかの人はどうしているのかしら」、と不安に思っておられます。

私は、そんな保護者さんたちに気楽に子育てについて話し合ってもらって、大切なことに気付いてもらい、自分の子育てに自信を持っていただけるような機会を作れたらいいなと思ひまして、この「親学講座」を開催しています。保護者さんは自信を持って、安心して子育てができれば、子どもたちは健やかにすくすくと成長していけるのではないかと思っております。私は子どもたちの健やかな成長を願って、親さん同士をつないでいます。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 先ほどの栗栖さんのご発表も、人と人がつながるそういう地域を作っていこう。そういうときに「放課後あそび隊」、そういったものも作りながら、話を聞くとそこでは子どもが主役のようですね。栗栖さんがやられているのは、そういう場をつくる、そういう居場所をつくるということにおいて、子どもをそこで主役にし、人と人がつながるということを試みられる。押越さんは、今度は大人が主役、大人同士が主役になり、そしてつながっていくそういう場づくりを「親学講座」という形で作っておられる。いずれにしても、人と人がつながるということをお大事にしておられるような感じがしました。渡部さん、田草さん、栗栖さん、押越さん、4名のパネリストの方にご発言いただいたのですけど何か4人の発表に共通する言葉として「つながり」、あるいは「人間関係」そういったことが出てきていたような気がします。ふるまい、あるいは「ふるまい向上」に向けて人と人がつながるということがやはり大事なのではないですかということ、今4人の発表の中から私自身感じました。皆さん方いかがだったでしょうか。

先ほど、押越さんと下で席が隣だったものでちょっと話をしていたのですが、たくさん保護者が子育てについて不安を抱えている。でも、それをじっくり話し合う機会がない。それは時間的にない。あるいは、その関係がない。だから1人で抱え込み、不安になり、結果的に子どもたちにうまい接し方ができないということが起こっている。「それは核家族の場合ですか。おじいさんおばあさんが一緒にいる場合は違うのではないですか。」と聞いたら、「いや、二世帯住宅であっても、おじいさんおばあさんが一緒に暮らしていても結構そういうことが起こっているのですよ。」というお話を聞きました。親同士、あるいは大人同士がつながって心を開いて不安は不安として語り合える、そういう場をつくるということが大事だということを感じました。

○これから一番大切にしたいこと

<加藤氏> それでは、フロアのほうからご質問等をいただく前に、4名のパネリストの方に、もう少し伺いたいと思います。今までの話は「これまでどういうことをしてきたか」ということでした。次に、「これからどういうことを大切にしていきたいか」ということを質問してみたいと思います。当然これからどういうことを大事にするかということについては、今抱えている課題は何かということも関わってくるのではないのでしょうか。また渡部さんからでよろしいでしょうか。

<渡部氏> これから一番大切にしたいことということですがけれども、僕はやっぱり親や大人が子どもにその背中を見せることではないのかなというふうに思います。どうしても「ふるまい向上」運動と聞くと、子どもに対してのこんなことをやっていますということがスポーツを浴びがちなのですけども、どう考えたって学校の教育の現場より家庭の中でお父さんお母さんと接している時間のほうが長いです。ですから、いくらそういう教育の現場で「ふるまい向上」運動を広めても、家庭の中でお父さんお母さんが「そんなものやめてしまえ、面倒くさい。」というようなことであっては全くこれは意味がないことだと思いますね。

ですから、あくまで家庭教育の中でそういったことはやっていくべきじゃないかなと。学校の先生の仕事ではないのではないのかなというふうな気もしています。ただ、本当に私もPTAの現場を2年間やっていますけれども、すべての子どもたちを考えてくれる親、自分の子どもしか考えない親、自分のことしか考えない親、3色くらいに分かれる。今3つ言いましたけど、最初に言った自分の子どもだけではなくてほかの子どもたちのこともいろいろと考えられる親というのは、なかなか今いないというのが現状です。良くて自分の子どものことを考える。一番酷いのは、もう自分の子どももほったらかしにして自分のことしか考えていない。そういった現場の中で、ではどうやってそういう大人を教育していくのか。すごく難しいことだと思うのですね。これを例えば幼稚園の先生だとか学校の先生に押し付けるのは、これは酷なことだしなかなか難しいことだと思います。

そこで、これは私の持っている自論かもしれませんが、やっぱり大人の意志を変えていくためには、例えば企業です。そういう大人の世界の中でもきちんと「ふるまい向上」運動というのをどんどん推進していかないといけないのかな。例えば、今世の中の企業の流れの中にあるのは、例えばマナー研修とか、心身を鍛える研修というのはどんどんどんどん下火になっているのですね。知識や技術を得る研修、そういった研修はどんどん会社の中でやっていくのですが、心、精神を鍛える研修はだんだんなくなっている。今ちょうどそれではいけないということで、新しくもつともつと心、心身を鍛えていくような研修をやっていかなければならないということで、だんだん火が付いてき始めているという状況ではあります。そういった大人の世界の中でももつともつと「ふるまい向上」運動を、研修とするとまたちょっと敷居が高くなりますから、当たり前なことを当たり前会社の社会の中でもやっていけるようにできればいいのではないかなと思います。

あと私の経験ですがけれども、陸上自衛隊に1日体験入隊をいたしました。ものすごく良

かったです。自衛隊というのは、普段囲まれており、中で何をやっているのかちょっとわからないようなイメージがあったのですけれども、きちんと一般の皆さんにも公開をしてくれて、中で体験入隊というのがあります。私は機会がありまして体験入隊をさせていただいたのですけれども、これはすごかったですね。まず、「ふるまい向上」運動で言っている、早寝・早起き・朝ごはん全部厳しく教えられます。それから、当然のごとくあいさつをする・時間を守る。こういったこともすべてみっちりします。

おそらく小学校とかでも、僕は昔小学校のときに「三瓶研修」というのがあって、三瓶の山の「自然の家」に泊められて、朝早く起こされて先生に怒られて廊下に立たされて、それでシーツがゆがんでいるともうそれだけで怒られてやり直しさせられる。全く同じことをその自衛隊の中でやっているわけです。いわゆる修練です。修練をして肉体・精神を鍛えるということが、小学校が、中学校であるのかわからないのですが、そういう場ではあるにも関わらず、大人の世界ではあまりないのです。ですから、本当に自衛隊に体験入隊をさせていただいて、朝早く起こされて5時半ぐらいですかね、5キロぐらい歩くのです。平坦な道もあれば山道も下り道もある。その中でいろいろな人間として必要なことを教えていただきます。例えば誰かが足にまめができてもう歩けないのです。そういったときに自衛隊の皆さんは、「頑張ってください、あと少しですから。」と声を掛けるのです。それってやはり助け合いの精神であったりとか、勇気付け。そういったところからすごく信頼関係とか、その声に僕らも踊らされるというかのってきて、最後は皆で肩を組みながら歩けなかったメンバーと一緒にこうやって抱えて最後ゴールする。ゴールするときはもう絶対皆でゴールするのだ。そして、一通りの心身を強化した後、最後は皆握手。お互いの健闘を称えて握手します。そういう人間のなんといいますか、いわゆる社会に出て必要になることというのを本当にこの自衛隊の中で教えていただきまして、私としては本当に今一番お勧めといったら軽いのですけれども、非常にいい施設の1つではないかなというふうに思っています。これは、私の経験の中の1つの話です。

「ふるまい向上を合言葉に・・・」というお話が最初にありましたけれども、私が考えるのは、やはり「ふるまい向上」を合言葉に子どもよりも大人が先に取り組もうということをお私に大事にして心に誓って、これからも活動をしていきたいなというふうに思います。以上です。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 ありがとうございます。大人がという言葉が出てきました。大人が先に取り組もう。大人が変わらなきゃということなのかもしれないなと思います。中学生の皆さんどうですか。

それでは、続いて田草さんお願いします。

〈田草氏〉 お願いします。

私は「ふるまい向上を合言葉に」、まず身近からということを考えております。「まず隼より始めよ」という言葉がありますけど、今までの私は医学部を卒業してお医者さんになったわけですからなんですけど、勤務医のときには患者さん患者さんと患者さんのために一生

懸命やれば、それで自分のやることは果たしているのではないかなという具合に思っていたのです。

家庭を全然顧みなかった自分があります。このフロアの皆さんの中にも仕事人間の、諸先輩にもいらっしゃるかと思いますが、まず家庭が落ち着いていないと本当の意味で患者さんに貢献することはできないというふうにあるとき気付かされまして、奥さんの話をよく聞くということです。それから子どもの話をよく聴くということから始めております。

「ふるまい向上」の委員をさせていただいて、振り返ったときにうちの実態はあいさつからまずなっていないのですね、実際は。夫婦間ではもちろんあいさつはしますが、高校2年生の男の子と小6の男の子ですから、こちらからあいさつをしても「おお。」と言えはいほうで、なかなかあいさつしてくれない。「ふるまい向上」の委員になったことをきっかけにして小6の子のほうには、「朝のあいさつは絶対に大切だからやろうよ。」という具合にお話をして、そして自分から「おはよう。」と言うようになっていたことがありまして、本当に高2の子はまだですけれども、そういう子も巻き込むように、これから身近からまず取り組んでいきたいかなと、それがひいては職場に波及し、そして地域に波及するのかなと言う具合に考えております。

職場ということでは、「ぼよぼよクリニック」は、患者さんと友達になる医療というのを提供しようとしています。患者さんと友達になる医療というのは患者さんに寄り添う医療ということなのですけれども、スタッフの力が絶対に必要なのですね。すべての企業で一緒だとは思いますが、そこでスタッフとパズルの1つの絵を完成させるように、私とスタッフが力を合わせていいところを伸ばして悪いところは補い合いながらできるような、本気のチームで患者さんに寄り添う医療が提供できるように努力しております。そして、地域への貢献はその先にあるものと思っております、今行っています「学校医は学校へ行こう活動」を含めまして、地域に出かけさせていただいているいろんな人とつながっていきなという具合に今後も思っております。「ふるまい向上を合言葉に」、まず身近からということでございます。ありがとうございます。

[拍手]

<加藤氏> すごいことじゃなくてもいいのだと、できることからやりましょうと、そういう身近なことからということなのかなと思いました。

それでは、栗栖さんお願いします。

<栗栖氏> 先ほどからつながりという言葉が何度も出てきているのですが、私も今日はそのことをお話ししたいなと思って来ました。自己紹介のところでも言いましたけれども、人と人とのつながりの中で生きていくことの豊かさだったり、楽しさだったり、確かさを実感できる地域にすること。その中に「ふるまい向上」というものがあるというふうに思っています。

つながりの中で生きていく立ち方というのが今とても大事かなというふうに思っています。それは、今多くの人がいろいろなことで不安を感じている時代だと思うのですね。経

済的な問題、健康上の問題、子育てのこと、いろいろ悩みを抱えながら私たちは生きています。でも一方で、今「自己責任」という言葉がとても肥大化しているのではないのでしょうか。もちろん責任の主体として、自分ができることをきちんと努力したり、積み重ねることはとても大事です。でも、私もここにいる人たち皆一度はくじけたり失敗したりしたと思うのですね。もし、「自己責任」だけを強調するなら地域も社会もいらないと思います。私たちが今まで築いてきたつながりというのは正に、ときにくじけたり失敗してもそれを支えてくれたり、やり直したりすることを応援してくれるそういう地域社会があることが大事だということで作られてきたかなというふうに思います。

今ここにいる大人たちは、ここにいる子どもたちがこれから厳しい社会に出て行くときに、不安が多い中でも、くじけたり失敗したときに、支えたりやり直すことができる、そういうつながりの確かな地域を作っていく責任、引き継いでいく責任、それが私たち大人にはあるというふうに思っています。ですけれども、つながりって、例えば勉強とかお金とかではなくて見えない、すごくつかみどころのないものだと思います。お金とか学力、テストで100点をとるとかいうのは、人と比べると不安になるのですよね。でも、つながりの中で支えあう社会というのは人と比べると社会ではなくて、つながりながら一緒に共に作っていく共同作業ですね。勉強とかお金を儲けるというのももちろん共同作業もあるかもしれないけど、どちらかという自分。自分さえ勉強すればとか。でも、本当に私たちが作っていきたい社会というのは、皆でやらないとできないというふうに思います。先ほどこ言ったように。

でもそれってすごく漠然としている。じゃあどうしたらいいの？つながりって、といったときに、形から入ってもいいんじゃないか。「えー、この人にあいさつするのか。」と思ってもまず言うてみることで、それがいつか本当に心のつながりになることもあるかな。と。「ふるまい」とは薄っぺらにもとれるし、本当にどんな社会を私たちが築いていきたいか。そのためのアクションとして、確かな思いをこめた、裏づけの中で身近な「ふるまい」から取り組むことができればと思います。しかし、どうしても子どもとの関わりで「あいさつしなさいよ。」とか言うと、世間体で親はあいさつできる子がいい子みたいな感じで、「あいさつした？あいさつは？」なんて言うてしまうことがあるのですよね。やはり、いかに日々私たちが地域で人と自然にあいさつをするか。私の反省ですが、子どもさんを連れのお母さんと出会ったときに、「あ、こんにちは。」と、お母さんを見てあいさつをすると、子どもは親同士があいさつしているというふうに見えるんですね。子どもに視線をむけないままあいさつを済ませていたと。やはり「ふるまい向上」を考えると、会ったら、お母さんにも子どもにも大人は「こんにちは」と言えるようでありたいと思いました。

私たちは、子どもも大人も対等な地域の大事な、先程言われた「ピース」として、あいさつを交わせる関係をつくりたいなと思い、日々努力しています。これからの地域社会では、人と人が対話をできる力が絶対に必要になってくると思うのです。そのためには、その基本としてあいさつをするとか、人が嫌がることはしないという基本を大切にするという面で、私たち大人ももう一度、傍若無人だったり、傍観者になったりしている部分はないかということをつりかえり、心得ないといけないなというふうに思います。

[拍手]

<加藤氏> 栗栖さんのお話から、またつながりという言葉が出てきました。筑波大学の門脇先生が「社会力」という言葉を今から10年前ぐらい、もうちょっと前でしょうか、言われました。日本の教育の中で「生きる力」という言葉が言われたころ、ちょうどそのころに「社会力」という言葉が出てきました。この「社会力」という言葉を門脇さんは、人が人とつながり社会をつくる力だというふうに定義されている。人と人がつながり社会をつくる力、それが「社会力」であり、この力は今の子どもたち、あるいは子どもたちが将来たくましく生きていくためには一番大切な力なのだと思いますということを言われました。そしてこの力は、大人が意図的に子どもに育てようとしないと育たない力です、というふうに当時提言されています。今栗栖さんのお話を聞きながら、その門脇先生のお話を思い出していました。もう1つ、形から入ってもいいんじゃないですかというお話も聞きました。形から入って心に至るという言葉をよく聞きますが、形から入ってもいいのではというお話、私もなるほどなというふうに思いました。

それでは、最後に押越さんのほうをお願いします。

<押越氏> 子育てで嬉しかったこととか、わからないこと、困ったこと、悩んでいること、あるいは家庭のことなどいろいろと話し合える関係づくりがとても大切だと思いますので、私はこの「親学講座」を通してやはり保護者さん同士をつないでいきたいと思っています。

人は悩んでいるときとか、困っているとき、弱っているとき、話を聞いてもらえるととても元気になります。そうしたエネルギーをやはり子どもさんを育てていく子育てに注げたらいいと思います。保護者さんには、子どもたちを目で見るというよりは、心の目で見たいと思っています。やはりそのためには、親としていろいろと学んで気付いていくことが大切になります。ですから、こうした保護者の皆さんの気付きの場とか機会をたくさん作っていききたいと思っています。本当にこれは私のライフワークにしてもいいのかなと思っています。

ことわざの中に「教育は家庭の教えで芽を出し、学校の教えで花が咲き、世間の教えで実を結ぶ」というものがありますけれども、このことわざの意味をやはりしっかりと私たちは噛み締めて本当に子どもたちの幸せを願って、私は人と人とをつなぐことをしていきたいと、これを大切にしていきたいと思っています。そして、何よりもやはり自分を振り返ること、自分が子どもたちの手本になれるように生きていかなければならないと思っています。以上です。

[拍手]

<加藤氏> 自分が手本になってというような話が出ました。ただ、皆そんなに強くないです。だからつながりましょう。弱いところは話し合ってつながっていきましょう。そうしたら、皆がそれぞれそれなりの手本になれるのではないかなと思いました。

○フロアから質疑応答

<加藤氏> それでは、時間があまりないですが、会場にいらっしゃっている皆さんから 4 名のパネリストの皆さんに質問をお願いしようと思います。時間がありませんので感想でも結構です。また、「ふるまい向上」に向けて、これからどういうふうな取組をしていったらいいのか。こういうふうなのはどうか、といったご意見でも結構です。感想、質問、これからの手立て、時間が許す限り受けたいと思います。いかがでしょうか。

<吉谷氏> 今市幼稚園の渡部 P T A 会長さん、私は昨年度まで今市小学校に勤めておりました。お話の中で生活習慣づくりのお話が出て、家庭が中心というのは、確かにそうなのです。私も生活習慣づくり等を進める時に、学校で一体何ができるだろうかということで、アンケートを行いました。例えば早寝、結果は出ますが、本当に起きているかどうかはわからない。そこで、学校での生活習慣づくりの確認の場として、昨年行ったのが今市小学校全校での宿泊体験学習です。

470 人が三瓶山に泊まりました。1 年生が 1 泊、2 年生が 2 泊というふうに、5 年生は 5 泊で 5 泊 6 日の宿泊体験をしました。そうすると朝起きる時間もわかりますし、それから朝ごはん、昼ごはん、夕ごはん、三瓶のバイキングできちんと野菜とかを取るかどうかわかります。そういう体験は、すごく良かったなと思います。

今年から県の教育委員会で、いろんな方に生活習慣づくりの大切さを伝えるにあたって、今年は脳トレでお馴染みの川島隆太先生に来ていただき、話していただきました。一番思うのは、来てほしい人が来てくれないとか、興味がない人に聞いてもらいたいというのが一番強いので、来年度は木村まさ子さんという方に依頼をしています。木村まさ子さんという人、どなたかわかられないかもしれませんが、SMA P の木村さんのお母さんです。その人に来てもらって食育のお話をしてもらって、興味のない方にも来てもらって是非たくさんの方に聞いてもらって、「ふるまい向上」を進めていきたいと思っております。これもクリニックの院長先生が言われた「学校医さんは学校に」ということで、学校医さんに劇の台本を作ってもらい、学校保健委員会等で生活習慣作りの劇をやったりしたことがありました。そういうこともすごく良かったなと、感想を交えてお話をさせていただきました。以上です。

<加藤氏> ありがとうございます。渡部さん、田草さん、今のお話を聞いて何かありますか。しつけは家庭で、〇〇は学校でというような言い方をよくしますが、学校でも家庭でもということが今大事になってくるんじゃないかなというふうに思います。

質問・ご意見は、中学生さん。

<竹中さん> 松江一中の竹中です。

渡部さんに質問なのですが、「おやじの会」の人たちとかでお母さん方とか子どもさん方とか、お父さんに対して印象とか、変わられたこととかありますか。

[拍手]

〈渡部氏〉 僕について言うと、嫁さんに「あなたすてき。」と言われましたね。でも、これは注意が必要でして、あまりのぼせすぎますと「頼むからやめて。」と言われるまでになりますので、ほどほどに節度あるのぼせ具合でやったらいいかなと思います。

〈加藤氏〉 竹中奈美さんですね。どうぞ、それについて。

〈竹中さん〉 ちょっとうちの家でもお父さんがあまりあれなので。

[拍手]

〈加藤氏〉 ありがとうございます。竹中さんの家だけじゃなくて多くがそうだと思いますが、「すてきだね」と言ってもらいたいなと僕も思います。憧れです。

ではそちらの。

〈フロアから〉 出雲から来ました。

実は今日来て何を感じたかという、娘がお産で家へ帰って来ていて、今東京のほうに帰って行きました。そのときに、出雲というか島根はいいなということをも感じました。というのは、やはり東京に高校を出てからずっといますので、やはり周りの人とのつながりが少ないということです。出雲に約半年近くいたのですが、その間にやはり 10 何年間の空白を埋めるというか、それは周りの人たちが「いつ生まれるの。」とか、「大丈夫。」という、本人にとってはあまり関係がない人でも皆さんが、私の友達とかが声を掛けてくれるということでもごく充実していました。逆に東京に帰るということで少し心配もあって、子どもが約 1 ヶ月になるところで帰りましたが、1 人になると先ほどのつながりがどのように東京で作れるかなということを感じております。

それがまずここにくるまでのところでありまして、そして今日パネラーの中に、実は高校時代のころから知っている渡部君がおられたということで、息子の 1 つ下なのですが、それも何かすごくドッキリで、やはり私の子どもも一緒にですけど、時代は今とまた教育が違うのです。さっきちょっと外で話していましたが、「やはり自分たちが何か自分のことしか考えてなかった。」みたいなこともチラッと、「そうそう、あの時代はそうだったかもしれないな。」と、だから教育というのはずっとつながってきている。

そして今日の中学生の本当に素直な気持ちを聞いて、一中の子どもたちが自分たちで何か運動というか、起こそうという雰囲気がすごく感じられて今日のパネルディスカッションというのは、何かすごくいい感じで「ふるまい向上を合言葉に」という最初の話がありましたけど、それまではそれぞれの立場でパネラーの皆さんが話しておられるのがすごくわかって、身近からするとか、親からとかというようなのも、そして子どもたちに大きなメッセージがいつているのではないかなと思いました。

この春の県民会議のときに前の教育長さんが言われたのが、「気付いたときから変化が起きる。」という櫻井よしこさんの言葉で、行動に移せなくても、まず気付くということから、これではいけないということから気付かれたらもうそこから世の中は変わっていると

ということ、島根県は人口が少ないので、ここにいる者が気付いて少しでも周りの人に言えば島根県中につながっていくんじゃないかなという。そして日本で一番住みやすい、「ふるまい向上」のできている島根県になるのではないかなと思います。以上です。

[拍手]

〈加藤氏〉 ありがとうございます。
どうぞ。

〈青少年育成島根県民会議 島田会長〉 今日は、4人のパネラーの方、あるいは前半の中学生の発表、それぞれに大変素晴らしいなど。また、4人のパネラーの方の実践に基づいた素晴らしい発表を拝聴させていただきまして、大変私勉強になりました。

いい会だったなと思って今おるところですが、その中で前半の加藤教授の、この「ふるまい」の根っこにあるものをというふうな言い方をされましたね。それから渡部さん、「ふるまい向上」はまず大人が変わらなきゃならない。我々県民会議では、トップに掲げておる合言葉は「大人が変われば子どもが変わる」これはもう何年も言い続けてきているトップの合言葉なのです。今日話を聞いてみますと、特に渡部さんがそういうことをおっしゃったのですけれども、子どもに「ああしろ。こうしろ。」ではなくて、まず大人自らが変わることによって、この「ふるまい向上」を図れるという話をなさいましたね。大変私は素晴らしいなど。「ふるまい向上」のためのいろんな実践が各点ありましたけれども、それは加藤先生が前半に用意していたこの「ふるまい」の根っこにあるものは何かというような現在やっておる how-to 的なことと、常に原点に戻りながら、そういう行動に移っていくと。

この「ふるまい」というのは、もうちょっと言葉を変えて言えば倫理であり、道徳だと思ふのです。人間の一番根本で私が思うことは、毎年新聞を見てもお互いにわかることです。殺すなかれ、盗むなかれ、居座ることなかれ、この根っこという言い方がもしできるとすれば、我々の毎日新聞見ている人を殺す、そして嘘をつくといった、こういう人間の最も根本的な資質をくんでいく。そのためにどうしていくかというような、そういう根本的な問いが田草さんも人間とは何かということをおっしゃいましたね。ああいう視点を常に振り返って、それから具体的にやっていくというようなことが私は重要じゃないかなと、今日はそういう原点的な話も出てまいりましたし、また「ふるまい」の具体的な方法についても話がありましたので、大変満足しております。ありがとうございました。

[拍手]

〈加藤氏〉 ありがとうございました。
そのほかご意見等ございますか。では、後ろから。

〈フロアから〉 私は県のほうの「ふるまい向上」の委員会の委員の1人で、今まで2回ほど会合に出させていただいて、私なりに自分に何ができるかということのを常に考えてまい

りました。そこで、先ほど櫻井よしこさんの気付いたときというお話を引用され、また島田先生のこと、私はこの「ふるまい向上」の委員会に出てから、過去において玄関で靴を揃えるときに、いわゆる出船の形にすることについて自ら黙ってそれをして、今6月の28日が第1回目でしたから約3ヶ月ぐらいあまり経って大体皆がしてくれるようになりました。

長女が自衛官なものですから車を止めるときに、私が車を運転しているときに頭から突っ込むと怒るのです。車はとにかくバックで止めて、とにかくすぐ出るようにすべきだということをいつも言うのです。これもいわゆる出船の精神です。私が是非申し上げたいのは、先般私どもの自衛隊のその同期生会を松江で開催いたしました。私は12なのですが、一回り上の1期生の大先輩が、「もうあなた方は還暦なんだから今までは会社人間で良かったけど、これからは社会人間になりなさい。」と、要するには社会のために尽くす人間になれということを書いていただいて、私今日は会社をずる休みして、この午後まいっておるのです。いずれにしても、今日ご参加の皆さんが少なくとも靴を玄関で出船に揃えるということをなさるとのことだけで随分違ってくるのです。今日からすぐ、帰られたらすぐできることです。是非それをお願いしたいと思います。以上です。

〔拍手〕

〈加藤氏〉 ありがとうございます。

もう時間そろそろきているのですが、何かご発言いただけるという方いらっしゃいますか。よろしいですか。

今日はあっという間に時間が過ぎてしまいました。本来はコーディネーターと呼ばれる者が最後に今日の話をもとめるということが大事なかもしれませんが、私はもとめる代わりにある詩を読んで終わろうと思います。この詩は誰が書いたかわからない。一説には宮沢賢治じゃないかと言われているものですが、「私が先生になったとき」という詩です。私、20～30年近く前に教壇に立つときに、この詩を大学の先生から贈られました。ずっとポケットに入れている詩なのですが、「私が先生になったとき」のこの先生のところにいろいろな言葉が入ると思うのです。「私が親になったとき」、あるいは「私がおじさんになったとき」、あるいは「私が近所の人になったとき」、あるいは「私が社会人になったとき」この先生のところにいろんな言葉を入れて是非最後に聞いてもらってまどめに代えようと思うのですが、お許しただけたらと思います。

「私が先生になったとき、自分が真理から目をそむけて子どもたちに本当のことが語れるのか 私が先生になったとき、自分が未来から目をそむけて子どもたちに明日のことが語れるのか 私が先生になったとき、自分が理想をもたないで子どもたちに一体どんな夢が語れるのか 私が先生になったとき、自分に誇りをもたないで子どもたちに胸を張れと言えるのか 私が先生になったとき、自分がスクラムの外にいて子どもたちに仲良くしろと言えるのか 私が先生になったとき、自分の闘いから目をそむけて子どもたちに勇気をだせといえるのか」 こういう詩です。

誰が作ったのかはわからないのですが、今日の「ふるまい向上」に向けて大人ができ

ることの話を聞きながら思い出された詩でした。ご紹介をすることによってまとめに代えたいと思います。

それでは、今日長時間お付き合いいただいたパネリストの 4 名の皆さんにお礼の拍手を送りたいと思います。 [拍 手]

<加藤氏> それでは、時間がまいりましたので、これで事務局のほうに司会をお返ししたいと思います。ご協力ありがとうございました。

[拍 手]

<司会> 予定をしておりました時間となったようでございます。加藤先生、パネリストの皆さん、そして発表してくださった中学生の皆さん、ありがとうございました。また、ご意見や御提言をいただきました会場の皆さんも大変ありがとうございました。この後、閉会行事のほうへ移らせていただきますが、ここでいったんステージの方はご降壇いただきます。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

[拍 手]

閉会あいさつ

<司会> それでは最後に、主催者であります、島根県健康福祉部 錦織部長からごあいさつを申し上げます。

<健康福祉部部 錦織部長> 健康福祉部長の錦織でございます。

長時間大変ありがとうございました。私はこのフォーラムに昨年から参加をしておりますが、このフォーラムは中学生の皆さん方の発表、それからいろんな分野のパネリストの方々のパネルディスカッション、非常におもしろいフォーラムでありまして、なかなかほかにない去年もそういうことをお話したなと思いますが、いろいろなところを探してみてもあまりないフォーラムでして、今日も非常に楽しい会になりました。中学生の皆さん方の発表に感動もいたしましたし、しっかりとした発表だなということで感心もしましたし、安心もしました。

おそらく島根県の先生も安心したと思いますが、それからパネルディスカッション、これは非常におもしろい取組の話をお聞きいたしました。医師確保で田草先生、忙しい中をどういふことでこのようないいこと取組をしておられるかと思つて感心しております。私自身、今日は加藤先生のお話にもありましたが、「ふるまい向上」は子どもさんから逆に教えられるという話もあったわけですが、自分自身家庭で地域で何をすべきかなということを考えさせられる時間でございます。

行政といたしましても、教育に関しましてお子さん方に関しましていろんな施策を進め

ていますが、行政として、それから青少年育成協議会の皆さん方と色々な団体の方と一緒に進んでいきたいと、そういうことを感じた時間になりました。引き続き皆さん方のご協力をよろしくお願ひしたいと思っています。

最後になりましたけれども、今日発表をいただきました中学生の皆さん、それからパネルディスカッションに参加いただきました先生方にお礼を申し上げまして、閉会のあいさつとさせていただきます。大変ありがとうございました。

〔拍 手〕

<司会> 以上をもちまして「しまね教育の日フォーラム 2010」の全日程を終了いたします。御参加いただきました皆様、大変ありがとうございました。

なお、事務連絡ですが、あらかじめ会場の皆様にお渡ししておりますアンケートにつきましては、会場出口に回収用の箱を用意させていただいておりますので、そちらのほうにご提出いただきますよう、お願ひいたします。

本日はご来場いただき、ありがとうございました。

〔拍 手〕